



(徳島)

徳島・常三島遺跡

じょうさんじま

1 所在地 徳島市南常三島町二丁目

2 調査期間 一九九五年(平7)八月～一九九六年三月

二 一九九六年六月～八月

三 一九九六年七月～十一月

3 発掘機関 徳島大学埋蔵文化財調査室

4 調査担当者 橋本達也

5 遺跡の種類 城下町(武家屋敷)跡

6 遺跡の年代 江戸時代(一八世紀～幕末主体)

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は徳島城の北端を流れる助任川をはさんで、城の北東に位置する。一は徳島大学工学部応用工学科棟の新築、二は工学部サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーの新築、三は工学部機械工学科棟の新築に伴う調査である。

「常三島」は蜂須賀入部以来一七世紀前葉ごろまでは、舟入として、「阿波水軍」の根拠地となっていたと伝えられており、干潟のような様相を呈していたが、元和元年(一六一五)の一国一城令など諸般の事情により武家屋敷地が必要となり、新たに造成されたものである。したがって、遺構はこの時期以降となるが、一八世紀後葉から一九世紀にかけての遺物が多い。木簡出土遺構の時期決定は、整理途上のため十分ではないが、右の間に使用・廃棄されたことはまちがいない。

屋敷地内からは多数の遺構が検出されているものの、木製品は、屋敷境を区画する用排水路からもっとも多く出土する。この溝は、それまで小規模であったものが、一八世紀後半に洪水対策として、二条の大規模な溝に作り替えられたものである。なお、もともと干潟を造成した土地のため、今日でも地下水位が高く、概して木製品の残存状況は良好である。

木簡は、一の調査で六点(溝SD〇三から一点、溝SD〇四から四点、土坑SK六九から一点)、二の調査で三点(土坑SK〇三・土坑SK二三・二・井戸SE〇一から各一点)、三の調査で二点(土坑SK四四二・土坑SK六〇一から各一点)出土した。今回はそのうち釈読可能なものとして、一の調査で溝SD〇四から出土したうちの二点と、二の調査で土坑SK〇三から出土した一点を紹介する。溝SD〇四は屋敷地区画の用排水路、土坑SK〇三は屋敷地内のゴミ穴と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

一 光応用工学科棟地点

(1) 「牧安太郎殿」

188×34×2 011

(2) ・「大江山」

いく乃、道の
とをければ」

・「五拾九
小式部内侍」

79×19×3 061

(1)は板目材で、上下とも切り折り。品目は書かれていないが、荷札木簡と思われる。屋敷を区画する溝からの出土である。寛政八年（一七九六）の御山下絵図によると、「牧梶五郎」の屋敷と記されている。牧家の記録としては「梶五郎」名の記録しか残っておらず、この「安太郎」が当主の名前であるかは不明である。(2)は板目材を上下左右とも丁寧に切断し、長方形に仕上げている。かるた小倉百人一首の五九番、小式部内侍の読み札である。これも(1)と同じ溝からの出土で、牧家の持ち物であった可能性が高い。

二 工学部サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー地点

(1) ・「かなしけれ」

・「一一十三」

63×19×4 061

右側三分の二ほどが欠損しているが、(1)と同様の作りである。同じく百人一首で、二三番大江山の読み札である。

なお、釈読にあたっては徳島県教育委員会文化財課の福家清司氏、徳島市立徳島城博物館の根津寿夫氏のご教示を得た。

(中村 豊)

